

今日は「母の日」ですね。我が子の救いのために、主に懸命に祈った、一人の母親の話をしたいと思います。その母親はマタイ 15 章 21～28 節に登場します。

イエス様がユダヤ地方から、異邦人の地ツロ、シドンに行かれた時の出来事です。

一人のカナン人の女性が出てきてイエス様に大声で叫びました。彼女は異邦人でした。

22 節「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます。」今、彼女の大切な娘が大変な目に遭っているのです。この娘のために、いやしのために、この女性は必死でイエス様に頼んでいます。この女性の姿を見ると、母親がどんなにか子供を愛しているかがわかります。わが子が助かるのであれば、恥も外聞もなく、もうどうでもいいのです。必死に願っています。

23 節A「しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。・・」イエス様は、この女性に対して人間的に言うならば冷たい態度を取られました。彼女を無視しました。更に、24 節「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」と言って相手にしませんでした。

----- 冷たい態度 -----

それにしてもなんとと言う態度でしょうか。今までイエス様の所には多くの人々が、異邦人も来ています。その人々にはその度に助けの御手を伸べていたのに、今回はどうしてでしょうか？女性を完全に無視されたのです。

----- 神の沈黙の中で -----

私たちも経験がありますね。祈っても、祈っても、神様から無視されているような時があります。そんな神様の沈黙の前に見捨てられたような寂しい思いになる時があります。そんな時「カナン人の女」を思い出しましょう。祈っても答えが来ない。そこには何か意味があるのでしょうか。それはその沈黙の経験の中で、私たちがいよいよ低くされて、ついにはあふれるばかりの大きな恵みに預かるためなのかも知れません。

このカナン人の女性も、イエス様に無視された時、頭に来て立ち去ることも出来ました。しかし彼女は願ひ続けました。「それでもあわれんでください。そのおこぼれでもいいからあずかせてください」実は、この態度こそが神様からの恵みを引き出して行く、へりくだった心なのでした。すべては拒絶される所から始まるのかも知れません。これが、神の恵みを受けるか、受けないかの分かれ目です。実はここで信仰がためされるのです。

それにしても、この女性のイエス様に対しての信頼には驚きました。（25～27 節）。ことわられても、ことわられても、イエス様に叫び続ける信仰。決してあきらめない信仰。

----- 試されたイエス様 -----

彼女は娘の事でイエス様にお願ひしましたが、無視されたり、犬と言われたりしました。でも彼女は、「なぜその様な事をなさるのですか？」と抗議しませんでした。ただ「主よ、その通りです。」とすなおに受け入れました。これは普通なかなか出来ないことです。

彼女は、イエス様の御旨を理解しようとしてました。自分の罪人としてのありのままの姿を素直に認め、受け入れました。

彼女は知っていました。イエス様は娘に最善の事をして下さるお方であることを・・」